

願成寺報

平成三十一年三月十三日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二一・九六〇一

■ 春季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが 仏様への報恩です
そのままの慶びを ご一緒に 見つめ直しましょう

○餅つき・草取り会

恒例になりました。
つき立てのお餅をオヤツにします。
だんだん仲間が増えてきました。
楽しいです。

是非、ご参加下さい。



三月 十九日(火) 午後一時 餅つき・草取り会

二十日(水) 午後一時半 法要のみ

二十一日(祝) 午前十時 法要・落語、法話
成田屋紫蝶 師、住職

正午 お斎(昼食)

午後一時 法要・落語、法話
成田屋紫蝶 師、住職

午後一時 法要・落語、法話
成田屋紫蝶 師、住職

何のために：

頑張ったのに結果に満足できない時や、人間関係に悩む時、
「何のために？」と考え込んでしまいます。

これを漫然と追いかけると「生きる意味」の問いとなります。
決着しないで過ぐすと、何かの宗教を盲信したりして、

華やかさや賑やかさで孤独をゴマカシますが、
生きることはドンドンとドロ沼化してしまいます。

「何のために？」は、ただのため息で、本当の問いではありません。
本当の問いではないのだから、
答えを先に用意して常備しておくの良いと思います。

「仏に遇うためなのだ」

今居る場所は不都合な荒野であって、無味の砂漠ではありません。
タンポポが苦境に耐えて花を咲かせているかも知れません。

何かの死骸に懐かしさを覚えるかも知れません。
一粒の滴に熱帯雨林のカラフルな鳥の声を聞くかも知れません。

いのちは私を囲んで輝いていたし、今も、未来も輝くでしょう。
この荒野だからこそ見出せた特別に輝くいのち。

思い通りの事柄は奇跡とは呼ばないでしょう。
思いを超えた所に奇跡はあります。

「その良し悪しを私は決めない」と決めましょう。
砂漠ではなかった。

思い通りにならない荒野は、私が作り出した幻だった。
ピンチはチャンス。頑張っていたし、これからも頑張れる。

男女貴賤コトゴトク 弥陀の称号称スルニ

行住坐臥ヲエラバレス 時處諸縁モサワリナシ

《讚阿弥陀仏偈和讚・親鸞聖人》

● 正信偈ノート ②4 ・源信章 I

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

源信広開一代教 偏帰安養勸一切
専雑執心判浅深 報化二土正弁立

黄色の勤行本の

三十九ページから

源信、広く一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して一切を勧む。専雑の執心の浅深を判じて、報化二土を正しく弁立せり。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

- ・ 一代の教之 釈尊の一生涯の教え
- ・ 広く開く 広く学び研究して
- ・ 安養 阿弥陀如来の本願の浄土と念仏の教え
- ・ 一切 一切のあらゆる衆生
- ・ 専雑の執心 専修（疑心自力を捨てて本願他力を頼む）心と、雑修（本願を疑って自力の諸行を交える）心
- ・ 浅深を判ず 専修は信心堅固で深く、不堅固の雑修は浅いとの判
- ・ 報化二土 阿弥陀如来の二種浄土
- ・ 眞実報土（眞仏土）は専修の人に報われる浄土
- ・ 方便化土（化身土）は雑修の人が囚われる浄土で、疑城胎宮・懈慢辺地とも表現される
- ・ 化土の往生人は久しくこの土に留まるがやがて疑いを破り眞実報土に生まれ直すとされる

・源信和尚

七高僧の第六祖。942年、平安中期の大和国当麻に生まれる。七歳にて父を喪う。一人息子であったが、母の強い勧めにて、

九歳で比叡山に上り慈慧大師良源の門に入る。

十三歳で受戒し僧となり、深く仏教を探究する。

十五歳、宮中行事の法華八講の一を講じ、帝の覚えめでたく、恩賞に反物等を賜った。この榮譽を母に贈ったところ、「名利にまみれるな」と戒め



の手紙が返る。また母は別の機会に「私が許すまでは会いに来てはならない」と叱咤したようだ（今昔物語）。

三十歳ごろから比叡山横川の恵信院に隠居し、学問に専念する。

四十二歳、初めて郷里を訪ねて母の最期を看取る。

四十四歳、『往生要集』を脱稿し、貴族文化に大きく影響する。

七十六歳で示寂するまで浄土教に深く帰依し信仰した。

主な著作

『往生要集』

諸経論釈の中から要文を集め往生極楽を指南する

厭離穢土 地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六道を厭うべき穢土と説く（痛渴障憂迷慢）

欣求浄土 極楽浄土に生れる十楽を説く

極楽証拠 極楽が諸仏浄土や兜率天に優ると説く

正修念仏 念仏往生道を五念門（天親）にて明かす

助念方法 浄土願生心を護り相続する方法を説く

別時念仏 平生別行と臨終行儀による念仏を説く

念仏利益 念仏による七種の利益を説く

念仏証拠 念仏を勧める証拠を説く

往生諸行 念仏以外の諸行による往生を説く

問答料簡 念仏に関する具体的な問題に答える

往生階位の段にて化土往生を指摘する

・比叡山の中で

日本仏教の総本山を自任する比叡山では、顕密の天台教学に加えて浄土教も取り入れている。山僧は教えに基づいて戒を守り、悟りを目指して修行する。念仏もそんな行として研鑽されていた。

けれど源信は、他と競い合う念仏に違和感を覚えていたと思う。

「純粹である為には現世に成果を求めてはならない」との確信から恵信院に隠居したのではないか。そして母の臨終を往生と看取った時、「全て常に仏の功德の中であった」と体解したと思う。

『往生要集』は、その思索を天台僧へ記した書物だと思ふ。

創作・源信和尚の孤独

天才とは生産性の高い変人だと思ふ。

生産性が高いので人々から称賛され、羨望を集め、地位も上がる。けれど変人なので理解と共感は得られない。

だから天才は孤独である。

どんなに孤独でも、分かってくれる人が一人あれば救われる。

源信には、それが母であった。

― 後の世を渡す橋ぞと思ひしに、世渡る僧となるぞ悲しき。

褒めて貰いたくて帝の褒美を母に贈った時、母は厳しかった。

戒めに従い隠遁したが、何を求めたらよいか解らなくなった。

寂しさが極まって会いたい時にも、山を下りることを禁止された。

瞼の奥の九歳で別れた優しい母の姿を、ずっと追ひ求めていた。

― 多武峰の増賀聖人のように貴い法師になつて…

兄弟子であり二十五歳先輩の増賀を母は貴いと思つてゐるが、

源信は、奇行ばかりが聞こえるその聖人を好きにはなれなかった。

母は間違つてゐる。

本当の救いを母に届けなければならぬ。

源信は寂しさから逃れるように浄土経典を読み漁つた。

母のどんな質問にも答えられるように準備がしたかつた。

けれど、問いばかりが膨らんで、收拾がつかなくなつてゐた。

母から「会いたい」との手紙が届く、危篤の知らせだつた。

源信が駆けつけた時、八十余歳の母は涙を流して手を合わせた。

問答は少なく、ただ源信を仏と仰いで亡くなつた。

源信も、この母を仏だと思つた。問答無用だつた。

既にずっと願われていた… そしてこれからもずっと。

理由も解らず、ただ有難くて、口にお念仏をお称えしてゐた。

源信四十二歳、その後、孤独を感じることはなくなつた。

『はじめて学ぶ七高僧』本願寺出版社、他より創作

【私見】 眞実報土と方便化身土

・ 弥陀の浄土

浄土とは穢土に対する語で、煩惱の穢れのない清らかな世界の事。通常は、菩薩が仏として成就した悟りの世界を指す。

この場合、同じ悟りを開いた人のみが行ける世界となる。

これに対し、弥陀の浄土は願心莊嚴の世界とされる。

十方のあらゆるいのちを輝かせようとする願いを届ける働き之源。

眞実報土と方便化身土に区別される。

・ 眞実報土

⑫ 光明無量の願と⑬ 寿命無量の願によつて成就された眞実の報土。

⑭ 至心信樂の願に呼応する他力念仏の人に開かれる世界。

我執の殻が破れ、奇跡に生かされてゐる事実に領き合う世界。

仏法僧の三宝に囲まれていたと知らされる世界。

無量光明土。

・ 方便化身土

眞実に導く方便として、衆生の心に寄り添う為に変化した仏土。

⑮ 至心發願修諸功德臨終現前の願を成就することにより、

我執と知らず、幻を追ひ求める人を臨終まで見捨てず寄り添う。

我執を放置し、狭い自己満足に応じた世界で、懈慢辺地と呼ばれる。

⑯ 至心廻向植諸徳本欲生果遂の願を成就することにより、

我執が破れず、現実を厭い、安樂を求める人に寄り添う。

奇跡に生かされてゐる事実に疑う世界で、疑城胎宮と呼ばれる。

懈慢辺地・疑城胎宮ともに三宝を見ない孤独の世界。

* 左記を参考にしましたが、理解不足で上手に書けませんでした。

左記は読み易く示唆に富む本です。お勧め致します。

『浄土眞宗の教え 眞実の教行信証』宮城顕著 東本願寺出版

行事予定 平成三十一年春以降

七月の月例会の開催日を変更しました、ご注意ください。

八月十五日(木) お盆・歓喜絵(住職)

法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時

九月二十二日(日) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時

十二月三日(日) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前六時半ごろ集合

十二月七日(土) 報恩講(節談説教 西川舜優師)

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり
七日 午後一時半から
八日 午前十時から

四月十二月 月例会

毎月一日 午後二時 日時変更の場合があります、
寺までご確認ください

七月は二日に変更します
ご迷惑をお掛けします



花まつり 於豊橋別院

四月九日 午後一時 華展・茶会
十日 午前十時 華展・茶会
十日 午後二時 仏教講話

講題 仏教的落語でお笑いを!
講師 落語 桂文月 師匠

↓ 後記 ↓

○ 思い通りだから孤独になる

「不寛容社会の原因はスマホにある」作家で演出家の鴻上尚史さんのAERA dot.の記事を、スマホで読みました。スマホに依存気味の私は、以前より少し不寛容になっているかも知れません。

テレビでは、私の興味でニュースを選ぶことができず、不自由です。けれどスマホは自由にニュースを選べます。「便利で思い通りな自由」に慣れた分だけ、不自由に不寛容になるのは道理でしょう。最近ではテレビ番組も録画して観たい所だけ観ています。CMは観ません。番組スポンサーには申し訳ない話で、皆がそうしたらテレビはNHKのみとなるでしょう。

スマホには選ばない自由もあります。例えば、豚コレラは身近で大きな問題なのに、豚の加害者側の私を知らされて、苦しくなるので読みません。

逆に日韓問題など、自分の正義感で批判できるようなニュースを好んで読んでいます。無責任に万能感を味わえます。

無責任を忘れて批判を投稿すると、ヒステリックな炎上問題が発生します。有名人の不倫とかバイトテロやデジタルタトゥー等、正義の行いが、立ち直れない程に、他人を傷つけています。

思い通りな自由と無責任な正義感が、社会を不寛容にしています。不完全な人間が不寛容な社会を造ったら、必ずそれぞれが孤独と なってしまいます。

鴻上さんは自意識と書いてましたが、自意識こそ自らを世界と切り離す、孤独を創り出す心だと思います。

○ われらは善人にもあらず 賢人にもあらず

自意識は、世界に認められたいと願います。ネットでは自分の行いや意見に「いいね」が欲しい。より多くの人から褒められたいと思います。現実にはなかなか叶いません。

自意識に囚われず、自分の弱さや貧しき虚しさを認めて、「迷惑でしかない私」の視点にて、仲間を見出し出していく他ありません。